

現代語訳

[本文対照]

枕草子

広島大学教授

稲賀 敬二訳



理
呈

現代語訳
先 草 子
〔本文対照〕

広島大学教授
稲賀 敬二 訳

著
者

現代語訳学燈文庫

目次

枕草子

◇現代語訳
本文対照凡例
概説

一	春は、あけぼの……………	22
二	時節の風物へころは／正月。一日は／三月。三日は／ 四月。祭のころ▽……………	23
三	法師のつらさへ思はむ子を法師になしたらむこそ▽……………	29
四	大進生昌の家へ大進生昌が家に▽……………	30
五	お猫様と翁丸へ上に候ふ御猫は▽……………	38
六	定澄僧都の枝扇へ今内裏の束をば▽……………	45
七	山は……………	46
八	教養試験へ清涼殿の丑寅のすみの▽……………	48
九	女性のための人生論へ生ひ先なく▽……………	58
一〇	興ざめなものへすさまじきもの▽……………	60
一一	憎らしいものへにくきもの▽……………	63

三	追憶をよびますもの△過ぎにしかた恋しきもの▽	69
三	心ゆくもの	70
四	説経の講師△説経の講師は、顔よき▽	71
五	菩提寺詣で△菩提といふ寺に▽	73
六	小白河八講△小白河といふ所は▽	74
七	木の花は	82
八	鳥は	85
九	虫は	89
一〇	寝起きの顔△職の御曹司の西面の▽	91
二	猫は	98
三	肥満型のスタイルは△若き人、ちごどもなどは▽	98
三	集は	99
四	気がかりなもの△おぼつかなきもの▽	99
五	めったにないもの△ありがたきもの▽	100
六	職の御曹司の秋△職の御曹司におはしますころ、木立 など▽	101
七	おもしろからぬもの△あぢきなきもの▽	103
八	地獄絵の屏風△御仏名のまたの日▽	104
九	草の庵の君△頭の中將の、すずろなるそら言を▽	106

三〇	物語の男△返る年の二月廿日▽	115
二九	則光の思い出△里にまかでたるに▽	122
二八	雪の山△職の御曹司におはしますころ、西の廂にて▽	128
二七	すばらしいもの△めでたきもの▽	141
二六	琵琶行の女性△上の御局の御簾の前にて▽	142
二五	しゃくなもの△ねたきもの▽	143
二四	聞き苦しいもの△かたはらいたきもの▽	145
二三	ほととぎすの歌△五月の御精進のほど▽	147
二二	九品蓮台のあいだ△御方々、君たち▽	159
二一	くらげの骨△中納言参りたまひて▽	161
二〇	淑景舎との対面△淑景舎、春宮に参りたまふ▽	163
一九	落梅の詩句△殿上より梅の皆散りたる枝を▽	166
一八	少し春ある心地△二月つごもりころに▽	167
一七	暑さと寒さ△冬は、いみじう寒き▽	169
一六	宣孝という人△あはれなるもの▽	169
一五	ばつの悪いもの△はしたなきもの▽	172
一四	道隆と道長△関白殿、黒戸より出でさせたまふ▽	173
一三	雨後の秋の朝△九月ばかり、夜一夜▽	175
一二	餅餠の贈物△二月、官の司に／頭の弁の御もとより▽	177

兎	月と秋と人△故殿の御ために▽……………	181
吾	鳥のそら音△頭の弁の、職に参りたまひて▽……………	184
三	円融院の御果ての年……………	188
三	手もちぶさたなもの△つれづれなるもの▽……………	193
三	手もちぶさたのまぎらわし△つれづれなぐさむもの▽……………	193
吾	山吹の花びら△殿などのおはしまさで後▽……………	194
盍	きよしと見えるもの△きよしと見ゆるもの▽……………	202
弄	かわいらしいもの△うつくしきもの▽……………	203
毛	つらそうなもの△くるしげなるもの▽……………	205
弄	じれったいもの△心もとなきもの▽……………	206
弄	気の早い七夕△故殿の御服のころ▽……………	207
六	近くて遠いもの△近うて遠きもの▽……………	216
六	遠くて近いもの△遠くて近きもの▽……………	217
三	女は……………	217
三	雪の夜△雪のいと高うはあらで▽……………	217
六	雪月花の時△村上の先帝の御時に▽……………	220
三	初宮仕え△宮にはじめて参りたるころ▽……………	221
突	赤い薄様の文△いみじう暑き昼中に▽……………	229
宅	言葉の感覚△ふと心劣りとかするものは▽……………	230

六	おくゆかしいものへ心にくきもの	232
充	山里の五月へ五月ばかりなどに、山里にありく	234
吉	田植えへ賀茂へ参る道に	235
七	稻刈りへ八月つごもり	236
三	初瀬詣での一夜へ九月二十日あまりのほど	237
三	柴たく香へ清水などに参りて	238
四	菖蒲の残り香へ五月の菖蒲の	238
五	薫物の香へよくたきしめたる薫物の	239
六	月明の川へ月のいと明かきに	239
七	みかさ山へ細殿に、便なき人なむ	240
八	ませ越しの青ざしへ三条の宮におはしますころ	242
九	大輔の命婦へ御乳母の大輔の命婦	243
〇	清水への便りへ清水に籠りたりしに	244
一	蟻通しの明神	245
二	降るものは	250
三	雪は	250
四	日は	251
五	月は	252
六	過ぎるのが早いものへただ過ぎに過ぐるもの	252

七	敬語の論△文言葉なめき人こそ▽	252
八	とてもこわいもの△せめて恐ろしきもの▽	255
九	男性論△男こそ、なほいとありがたく▽	255
一〇	思いやり△よろづの事よりも▽	257
一一	うれしいもの△うれしきもの▽	258
一二	紙と畳△御前にて、人々とも▽	261
一三	花盗人△関白殿、二月二十一日に▽	266
一四	訪問者あれこれ△成信の中將は▽	273
一五	香炉峯の雪△雪の、いと高う降りたるを▽	276
一六	女主人の夢△宮仕へする人々の、出で集りて▽	277
一七	気の許せぬもの△うちとくまじきもの／思へば、舟に 乗りてありく人ばかり▽	279
一八	物語的な素描△男は、女親亡くなりて▽	281
一九	遠江の子△ある女房の、「遠江の子なる人を▽	282
二〇	走り井の水△便なき所にて、人に物を言ひける▽	283
二一	跋文△この草子、目に見え心に思ふ事を▽	284
付録	藤原氏(北家)・皇族・源氏・平氏・橘氏・高階氏・清原氏略系図	287

凡 例

一 本書は、『枕草子』三百余の章段の中から、類集的章段、随想的章段、日記実録的章段のすべてにわたり、その約三分の一を選んで現代語訳し、その訳文を収めた。

二 現代語訳は、直訳を避け、現代の文章として自然に鑑賞できる訳文を目ざし、原文の持ち味を忠実に生かすように努めた。このため、次の処置を加えた。

1 主語・述語を補い、語順を変え、また長文は短く切るなどの処置をした。

2 登場人物の心理、執筆者の興味の所在などが容易にわかるように筆を加え、内容にふくらみを持たせた。

3 語釈、あるいは注を要する引歌、故事なども、可能な限り現代語訳の中に折りこんで、読み進む時のリズムに合わせるように努めた。

4 和歌・漢詩などは、原則として改行二字下げで現代語訳し、和歌の技巧などもその中で理解できるようにふうした。

5 各章段には内容に即した題名を、さらに長文の章段は数個の段落に分け、「」で小見出しをつけた。

6 日記実録的章段には、事件の年次を章段題名の下に「」でかこんで示した。諸説あるものについては、その一説または私見によった。

三 原典原文は、現代語訳の下欄に対照してかかげ、次の方針によった。

1 原文は三巻本の本文により、現在広く流布していると考えられる日本古典文学大系（岩波書店刊）を底本としたが、通読しやすい本文を目ざし、田中重太郎博士『校本枕冊子』などを参照して適宜校訂した。なお、校訂箇所、およびその理由などは煩雑になるので注記しなかった。

2 章段のたて方は大系本によった。

四 略注は最小限にとどめ、人物・故事・引歌などに限った。なお、現代語訳の中で処理できるものは略注から削除した。取り上げる語句は原文の該当箇所にも*印をつけた

五 概説は、現代語訳を読み進める時の指針になる範囲にとどめた。細かな事実は略して、清女の宮仕え期間前後を中心とする編年的な伝記とし、各々に、本書の日記実録的章段とのかかわりをゴチック活字で注記した。日記実録的章段は、原典の配列順に読むより、事件年次の順に読むほうが、理解しやすいと考える編者の判断による。

六 目次は、現代語訳各章段に付した題名で示した。章段の題名と原典冒頭の句とが異なる場合は、その下に△▽でかこんでその段の冒頭の句を示した。

なお、本稿をなすにあたって、多くの注釈書などから学恩を受けた。出所を明記することができなかったが、記して感謝申し上げたい。

概 説——日記実録的章段の読み方——

枕草子は随筆だといわれる。しかし、この中には日記実録的な章段が多く含まれている。この部分は、他の日記文学作品と同じように、年次順に読むほうがわかりやすい一面もある。本解説は、日記実録的章段を読む時の手引きともなるように、ほぼ年表的に叙述した。ゴチックで示した章段名は、本書に収められたものである。

【祖父・父】 清少納言の祖父清原深養父ふかやふは元慶五年（八八一）頃に生まれたいらしい。家集一卷を残す歌人で紀貫之などとも交わったようである。清少納言の父元輔もとすけは延喜八年（九〇八）の誕生、天曆五年（九五二）正月、河内権少掾しやうじやうに任ぜられたのは四十四歳の時であった。この年、十月、村上天皇の勅命によって梨壺なしつぼの昭陽舎に和歌所が設けられ、元輔は紀時文、大中臣能宣よしのぶ、源順したかう、坂上望城もちぎとともに、ここで『後撰和歌集』の編纂へんさんと、『万葉集』の訓読の事業に参加する。「二三 集は」の段に万葉と古今とをあげて、後撰にふれてはいないが、著名歌人の子であることを誇りにも思いつながら、祖父・父の名をけがすまいという配慮を忘れない清女であるから（三七 ほととぎすの歌）、あえて後撰集をここにあげなかったのかもしれない。

【清女の誕生】 清少納言はこの村上天皇の治世の最晩年、康保三年（九六六）頃に生まれたと推定されている。藤原道長や公任きんとうが生まれたのと同じ年である。かねがね道長に深い関心を持っていた

のも（「四六 道隆と道長」）、公任と親しく交際しているのも（「四二 少し春ある心地」）、同い年という親近感が働いていたのかもしれない。村上天皇の時代の話は天皇と兵衛ひょうえの蔵人くらうどという女官との風雅・機知の応酬などが記してある（「六四 雪月花の時」）。父元輔から聞いたものかもしれない。もう一つ、宣耀殿せんようでん女御芳子の古今集についての知識を村上天皇が試してごらんになった話（「八教養試験」）は、清少納言が宮仕えに上がってから、中宮定子の口くちを通して聞いたことになっている。村上天皇は、清少納言が仕えた中宮定子の御夫君一条天皇にとっては、御祖父にあたる方である。清少納言にとっては、父元輔の縁から、中宮定子の縁からも、村上天皇の時代の話には、関心を抱いたであろう。白樂天の詩をうまく使いこなして村上天皇から賞讃された兵衛の蔵人という先輩の話から、清少納言は、女性が宮廷社会の中で漢詩文についての教養をどのように利用すればよいのかを知ったであろうか。また、中宮定子は、清少納言たち女房の才能を自由に伸ばす場を、折にふれて設定し（「九五 香炉峯の雪」）、女房たちの反応がかんばしくない時は、宣耀殿の女御の記憶力のすばらしさなどをお話しになって、やんわりと彼女たちを激励されたわけである。

【清女の結婚】 清女は天元四年（九八一）、橘たちばなの則光のりみつと結婚したらしい。翌五年、二人の間には一子則長が生まれている。娘の結婚と孫の誕生を見とどけた父元輔は、寛和元年（九八六）正月、肥後守となって遠く九州へ下った。清女は元輔の晩年にもうけた娘であったから、彼女の姉で、道綱の母の兄にあたる藤原理能まさとうの妻となった女性は、清女より三十歳近くも年上であった。花山院の殿上法師で歌人でもあった戒秀かいしゅう、後に雅楽頭うたのかみの職についた為成、藤原保昌やすまさの郎等だった致信、それに

宗高などという兄たちも、清女より十か二十か年上であった。

父元輔が肥後守となった寛和元年六月に起こった花山天皇の突然の出家という事件は、清女の記憶に深くきざまれた。六月十八日から二十一日まで、済時なりときの小白河の邸で行われた法華八講の時、彼女は、法華経の知識をふまえた機知で、義懐よしちかと応酬したが、花山天皇は突然に出家、それに殉じて義懐も翌六月二十四日に出家した（「一六 小白河八講」）。兼家や道兼たちが綿密にたてた計画のとおり事が運んだわけであるが、清女が果たして、この政治の舞台裏まで知っていたかどうか。ともかく、数日前、華麗な法華八講の中で朗かに立ち動いていた義懐の出家は、貴族の華かな生活の背後にある、はかない人間の「運命」を清女に知らせるにはじゅうぶんであったろう。

【中の関白家】 短い花山天皇の時代が終わり、一条天皇が即位、兼家は摂政・権大納言となり、道隆は権中納言となつて、清女の活躍の舞台が準備されていた。正暦元年（九九〇）一月、一条天皇の元服とともに、道隆の娘定子は入内じゆだいして女御となり、十月には中宮となった。太政大臣、関白兼家が五月出家すると、道隆は関白・摂政となる。六月、元輔が任国肥後で八十三歳の生涯をとじた知らせのとどいた頃、七月二日、兼家も六十二歳で世を去った。後に紫式部の夫となった藤原宣孝のぶたかが、この年の三月、華麗な衣裳を着て御嶽詣みたけでをして人々の耳目を驚かせ、さらに筑前守に任ぜられる異例の人事で、人々を再度驚かせたりした（「四四 宣孝という人」）。正暦二年二月、円融法皇が崩御、翌三年二月には御周忌の御齋会が行われた。この時、一条天皇と中宮とがしめし合せて、一条天皇の乳母藤三位とうさんみをおからかいになった話は、後々まで語りぐさになった（「五一 円融

院の御果ての年」。正暦四年四月、道隆は摂政を辞して閑白となる。左大臣源雅信は七月、七十四歳で没し、右大臣源重信も七十二歳、道隆は四十一歳の年である。内大臣には三十三歳の道兼、大納言には藤原朝光、済時、権大納言には二十八歳の道長と二十歳の伊周という面々であった。

【清女の宮仕え】 正暦四年（九九三）冬、清女は定子のもとへ宮仕えに出た（「六五 初宮仕え」）。冗談などを連発して明るい雰囲気が好きで道隆は、かねてから清女の噂を耳にしていたのである。一方、清女のほうは宮仕え当初、「恥かしくてたまらない、なぜこんな宮仕えなどする決心をしてしまったのだろう」とくやんだりした。「宮の五節出ださせたまふに」の段（九〇）はこの年の十一月十五日、^{とよのあかりのせちえ}豊明節会に、中宮が五節の舞姫を献じられた時の話であるが、^{さねかた}実方の歌に返歌する者がいないのを見て清女は歌を詠む。彼女自身がおもてに出るのではなく、弁の御という女房に伝えさせるのだが、この女房も恥かしがって、結局この歌は相手に伝わらずに終わってしまう。「かえって、まずい歌で恥をかかずにすんでよかった」と清女は書いている。きのきいた返歌のできる女房は一人もいなかったというのは、中宮の後宮の恥になり、要員として出仕させられている清女としては、矢張り職務を果たしたい。が、宮仕えという場にまだ慣れていない清女は、自分の歌を、より効果的な形で伝える方法を、身につけていない。初宮仕えの頃の一こまである。

正暦五年（九九四）二月、道隆が積善寺で経供養を行った。中宮、東三条院も行啓。この時のエピソードとして、道隆が造花の桜をこっそり撤去したのを目にした清女は、気のきいた発言をしている（「九三 花盗人」）。中宮はこの月の下旬、女房たちに古今集の歌の記憶試験を行い、とっさ

の折に、すぐ対応できぬ女房たちには、先例を引きながら、特訓を繰り返す（「八 教養試験」）。特に、清女に対しては、名ざして「少納言よ、香炉峯の雪、いかならむ」と課題を出し、彼女が才能を発揮する場を作り、あわせて、彼女が自主的に行動できる自信を持てるように督励したりなさった（「九五 香炉峯の雪」）。道隆への讃美はもちろんであるが、道長への関心も深くなってきた（「四六 道隆と道長」）。ようやく宮仕えになれてきた清女は自分の判断で一つの場面を盛り上げることをめざして行動するようになる。この年の十二月、地獄絵の屏風を、気味が悪いから見るのはいやだと清女が逃げ出す話がある。清女の好きではなかったもののリストは枕草子にもあちこちにある（「八八」とてもこわいもの」「九七 気の許せぬもの」など）。これを見れば、およそ察せられるけれども、たかだか地獄絵の屏風で逃げだす彼女とも思えない。この時は、伊周これちかの琵琶行の詩の朗詠をきっかけにして、部屋へ逃げこんでいた清女は、のこのこ出て行って皆に笑われたという話のおちになっている（「二八 地獄絵の屏風」）。ほんとうは、この絵で何かおもしろい会話を組みたてたいと想を練るための時間かせぎ、そして琵琶行の詩の朗詠を耳にして出て行ったのも、これをきっかけに話題を展開しようという気でいたのだろうが、あいにくこの場には、話題を展開するのにうってつけな相手が居あわせなかったということなのであろう。同じ琵琶行を材料にして気のきいた会話が成りたつ例（「三四 琵琶行の女性」）と比較すべきである。彼女が言動に自信を持つようになっても、これをもてはやす人物が必要なのである。

【齊信との交渉】 長徳元年（九九五）二月、頭とうの中將 齊信ただのぶは、清女と絶交宣言をしたが、間もな

く清女の才氣を評価して、二人の仲は旧に復した（「二九 草の庵の君」）。絶交宣言の原因となった「すずろなるそらごと」が何であったかは、具体的には何も書いてない。ところで、この年一月、実方さねかたが陸奥守になっている。実方の陸奥下向は、殿上で行成と喧嘩をし、短気な実方が藤原行成の冠を地べたに叩きつけた現場を帝がごらんになって、「歌枕でも見てこい」と、ていよく左遷されたという伝説もある。実方との交渉に関係があるかと思われる段はほかにもまだある。そういう話がまことしやかに噂されるのが、すなわち「すずろなるそらごと」である。「実方が陸奥へ行く」と、次に清女と仲よくなるのは誰だろう。「次は斉信と行成とが喧嘩する番じゃなかろうか」「いや清女は二人を比べて、あっちのほうが好きだと言ったそうだよ」などという無責任な噂が流れて、斉信が怒ったというような様子を、私は想像してみたりする。だから斉信は、もっと親しくしてくれればいいのにと清女をくどいて、「頼もしげなの事や」とふくれてみせたりもする（「四九 月と秋と人」）。そういえば、翌二年二月、清女が中宮のお供をしないで梅壺に残り、清女の所へは斉信から面会申し込みの手紙が来たり、話しがあるといいながら、特別な話題も持ち出さぬまま斉信が帰って行くといういきさつや、この段で清女が口をきわめて斉信をほめる口吻など、背後に二人の特別な感情を想定してもよいかもしれない（「三〇 物語の男」）。ともかく斉信は、清女の期待に合致する適確な反応を示す才人であり、宣方などとはおよそ比べものにならぬ人物であった（「五九 気の早い七夕」）。長徳元年、二年の頃、清少納言は、斉信とのこういう会話を楽しんでいた。二年四月、参議になってから、斉信は次第に疎遠になったようだ。その原因は次の事件ともかわ